

高垣楓「私、被虐行為
に興奮するんです」

ドラ夫

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

もしアイドルがこんな性癖を持っていたら〜というノリ

目次

高垣楓「私、被虐行為に興奮するんです」

1

白坂小梅「えへへ……私を、殺したい？」

29

高垣楓「私、被虐行為に興奮するんです」

絶え間なく耳に入ってくる万雷の拍手。止むことなく炊かれ続けるフラッシュの嵐。収まることを知らない人々の熱狂。

——二万人。

ため息でさえ大きな音となるこの人数が、一人の女性の為に集まり、精一杯の祝辞を述べていた。

紳士は少しでも彼女の目に留まろうと高級スーツを着こなし、淑女は少しでも彼女に近づこうと今日の為に新調したドレスに身を包んでいる。

しかしそんな豪華な観客達に囲まれようと、今日の主役である彼女の美しさは少しも色褪せていない。むしろ石ころの山の中にあるダイヤが輝く様に、他のすべての人が彼女の引き立てている様にさえ見える。

そしてこれほどの熱狂に包まれていようと、彼女の持つ独特の雰囲気、世界観は少しも変わらない。むしろ他の観客達が、少しづつ彼女に呑まれて行っている様な気さえる。

今日は彼女——高垣楓のトップアイドル・アワード授賞式。

事実上、彼女は今日この日を持って全てのアイドルの上に立つ事になる。

純白の豪華なドレスを見事に着こなし、熱狂する人々に萎縮することなく、普段通りのなだらかな笑みを送る彼女を見ると、その称号は相応しいことが伺える。

彼女が司会者からマイクを受け取ると、シンと会場が静まった。先程までの熱狂が嘘の様だ。

マイクを通して、彼女の息遣いが聞こえてくる。その音は先程までの大歓声より、強烈なインパクトがあった。たった一つのため息が、二万人を圧倒していく。

「今日は私なんかの為に集まっていたいただき、ありがとうございます」

彼女と出会ってからもう四年ほどになる。それでもこの声を聞きたびに、もっと聞きたい、と思ってしまう。いつまでたっても聞き慣れない。良い意味で、だ。

「この賞を受賞出来たことはとっても名誉なことだと——」



「ふう……」

惜しむような拍手を背に受けながら、彼女が舞台袖の方に歩いて来た。

急いでスタッフ達が近寄り、嬉しそうにタオルや酸素ボンベを渡していく。

彼女に仕えるのが嬉しくて仕方がない、という様子だ。

あれじゃあもう灰かぶりじやなくて、お姫様だ。実際アイドルの頂点になったのだから、あながち間違えではない。

彼女は俺の存在に気がつくつと、トコトコと歩いて来た。

ただでさえ身長の高い彼女が今日はハイヒールを履いているせいで、ほとんど俺と変わらない高さになっている。

一步、二歩——俺の方へと少しづつ、しかし確かに近づいてくる。そして俺と彼女の距離がほとんどなくなり——そのまま俺の横を通って行った。

「この後、いつもの居酒屋で待っています」

通り際、彼女は俺の耳元で甘く囁いた。

この後スタツフと打ち上げがあるはずだろ？　と言おうとしたが、彼女は振り返って、俺の唇に右手の人差し指を当てて言葉を止めた。

まるで俺の心を読んで、言葉を先読みしたみたいだ。

彼女の指は長くて、細くて、白い。爪には翠色の星のマニキュアが塗られていた。

今度は左手の人差し指を自分の唇に当てて、一つウインク。

俺は見事に何も言えなくなった。

次の瞬間には彼女は俺のことを見てなくて、今のプロデューサーの方に歩いて行って

いた。



いつもの居酒屋、そう彼女は言った。俺はフラフラとした足取りで、一軒の寂れた居酒屋に来ていた。

ここでいいのだろうか、と不安になる。

確かにここには彼女と何度も来たが、それは遠い昔の話だ。彼女が売れ、新米プロデューサーである俺の元を離れ、上司のプロデューサーが担当になってからというもの、一度も来ていない。

二人でよく来ていた時よりも更に錆びれた看板を見て、ふと昔を思い出す。

あの時は彼女はモデルを辞めたばかりで金銭的余裕がなく、よく俺がここで奢っていた。

今ではもう、彼女は俺の何倍、いや何十倍とお給料をもらっているだろう。こんな居酒屋になんて、行くことはないんだろうな。

ドレスコード必須のレストランで、シエフに料理の説明をされながら、一品一品丁寧に食べていく。相手は——そうだな、若手の実業家なんかが相応しいだろう。

いつか一緒に和歌山に行こう。ええ、是非いらして下さい。いっぱい案内しちゃいます。

こんな曲を歌えたらいいですね。きつと歌えるさ、いや歌える様にしてみせるさ。

ここはホツケが美味しいんだよ。本当ですか？ それなら一口食べさせて下さい。代わりに、焼き鳥をどうぞ。

昔は本当に色々なことを話した。

でもそれはやっぱり昔のことと、昔の事というのは大抵美化されるものだ。

特に何をするでもなく突っ立っていると、彼女が向こうの方から歩いて来た。

特に視力は良い方ではないが、どれだけ遠くにおいても彼女だけはハッキリと分かる。

白いプラダのコートをスツポリ来て、大きめのサングラスを掛けていた。変装用だろうか。

首には俺が昔プレゼントした、赤いマフラーが巻かれていた。俺としてはちよつと背伸びして買った物だが、今の彼女からしてみれば安物だ。それなりに時も経っているの
で、ヨレてきている。

彼女が来ている他の服や装飾品と比べると、そのマフラーは見窄らしく、酷く不釣り
合いだった。

あのマフラーは正しく俺だ。

もうとつくに場違いなのに、なんとか彼女にしがみついている。彼女の優しさに甘えて。

それを今日こそ、断ち切らなくてはならない。

ずっとそれが恐ろしくて、逃げてきた。それも今日で終わりにしよう。

「お待たせしました、プロデューサー」

「そんな、待つてなんかいませんよ。それと私はもう、高垣さんのプロデューサーじゃありません」

「すみません。でも、プロデューサーって呼び方がしつくりくるんです。呼んではいけませんか？」

……どうせ呼ばれるのは今夜が最後、か。

むしろ名前と呼ばれるよりも、スキヤンダルになり辛いかもしれない。

「わかりました。プロデューサー、で構いません」

「……そんな畏まった話し方、しないでください」

「そんな訳には行きませんよ。俺みたいな新米プロデューサーが、貴方みたいなトップアイドルに昔みたいな口調で話すなんて、そんなこと出来ませんよ。分かるでしょう？」

「分かりません」

彼女にはこれからがある。

トップアイドルになったからって、高垣楓はそこで止まらない。日高舞の様にトップアイドルを超えたアイドルになって、やがて女優に転換して……

そこから先は、俺には想像も出来そうにない。とにかく、彼女にはこれからがある。そしてその道を閉ざさないことが、俺に出来る最後のプロデュースだ。

「今日はお誘いを断りに来たんです。この後恋人と会う約束があるので。まあここに来たのはついんです。待ち合わせの場所が近くだったので、直接会って断った方が良いでしょう」と

「嘘です」

「……本当です」

「いいえ、嘘です。興信所に調べてもらいましたから。プロデューサーに恋人や肉体関係を持つ友人などはいません」

「興信所……?」

「どういふことだ? そう俺が聞く前に、彼女は膝を折ってその場に座り込んだ。そのまま腰を折り、三つ指をついて——早い話土下座した。」

「ちよ、ちよつと! ここ地べたですよ! いや、それ以前に土下座なんて止めて下さい!」

「お願いします……どうか……お願いします……」

「分かりました、分かりましたから！」

こんなところ記者に、いや一般人にだって見つかるわけにはいかない。俺は土下座する彼女を無理矢理立てて、急いで居酒屋に入った。

彼女はとても、軽かった。



「かんぱい」

「……かんぱい」

ビールが並々と注がれているジョッキをコツンとぶつかる。

その動きは正に阿吽の呼吸というやつで、こぎみよい音を響かせながらも、中の小麦色の液体をこぼすことはない。

そのことが嬉しくもあり、嬉しくなった自分が少し不愉快だった。

無言で座っていると、頼んだ料理が何品か来た。お刺身などの海鮮系を中心に、ゴボウサラダなどの野菜を頼んだ。幸いなことに、俺と彼女の食事に関しての好みは似通っている。

カチャカチャと、箸を動かす音だけが響く。時折飲み物を飲む音も。

こんな美人とお酒を飲みに来て、この態度は男として失格だろう。しかしこれで良いのだ。俺は今日楽しみに来たのではないのだから。

何も起こさず、何もせず帰る。それが今日俺がすべき事、いやするべきでない事か？

「プロデューサー」

「……何ですか？」

「初めてお会いした時の事を覚えてますか？」

「ええ、まあ。臍げには」

「私はハッキリ覚えてますよ。不慣れな都会に疲れて、地元のお酒を探していたら、プロデューサーが話しかけてきたんです。「アイドルに興味ありませんか？ あ、いや、その、怪しいキヤッチとかじやないんです！ ホラ、名刺見てください！ バラエティとかの提供スポンサーとかで見える名前でしょ？」。一字一句、仕草に至るまで覚えてます」「……そうですか。私は忘れてしまいました」

嘘だ。

一字一句、仕草どころか、全てを覚えている。雑踏の音、空気の匂い、道行く人の顔に至るまで、全てを覚えている。

人は何かショックな事があると、その時の光景を一生忘れないのだという。

例えば普段使っている電車。普段乗っている時の事など覚えていないが、隣に座ったおじさんの体臭が臭かった時などは、いつまでたっても記憶に残っている。

おじさんの体臭となど比べるべくもないが、俺にとつて高垣楓との出会いは相当衝撃的な事だったのだろう。

……そういうえば、何故彼女は今になって俺を誘ったのだろう？ 日本酒を飲む彼女を見ながら、ふと考える。

俺の事を好き、何て事はないだろう。もしそうだとしたらこれまで何の音沙汰もなかった事が不自然だし、俺にはそこまで好かれる要素はない。

これまでお付き合いした人数は二人。二人とも向こうの方から別れを切り出した。

告白を断られた事は五回。五人ともそこそこ仲良かったんだがなあ。

告白された回数、一回。でもあの娘、色んな人に告白していたからノーカンとしても良いかもしれない。いや、悔しいからカウントしとこう。

またとにかく過去のデータを検証しても分かる通り、俺はそんなに魅力的な人間じゃない。少なくとも、高垣楓と釣り合う様な人間じゃない。

話が逸れたか。

今大事なのはどうして彼女は今になって会いに来たのか、だ。

今のプロデューサーに嫌気がさした？

それはない。

彼女と今のプロデューサーの仲の良さは、会社の中でも評判だ。何度か二人でいる所を見た事があるが、あの噂が真実だ。間違いない、二人の仲は良好だ。

昔仲の良かった人間と、久しぶりに飲みに行きたくなかった。

これは実際、俺もよくある事だ。

旧友と昔話に花を咲かせながら、昔からの味を楽しむ。なんとも心躍る事だ。

しかし今日はトップアイドル・アワー授賞式。何も今日行かなくても良いだろう。

彼女は気分屋などところがあるが、流石に名誉ある授賞式の打ち上げを無意味に蹴る様な真似はしないだろう。

「私、待ってたんですよ」

「えっ?」

「プロデューサーがまた居酒屋に連れて行ってくれるの、待ってたんです。私は囚われのお姫様ですから、王子様が迎えに来てくれるのを、待ってたんです。でも痺れを切らして、自分の方から会いに来ちゃいました」

囚われのお姫様。

俺と彼女が一緒にした最後のお仕事。

……心が、グラついた。

高垣楓に「待っていたんです、王子様」と言われてグラつかない男がいるだろうか？
いや、居ないだろう。

ダメだ。彼女のペースに吞まれつつある。ここは早めに本題を切り出して、さっさと会計を終えて、タクシーを呼んで帰らせよう。

「高垣さ——」

「プロデューサー」

小市民の俺の言葉は、お姫様の言葉に簡単にねじ伏せられた。

居酒屋に広がっていた喧騒が俺の耳に入らなくなり、料理の味と匂いが消え、遂には視界から彼女以外の全てが消えた。

しかしそれに反比例するかの様に、五感は鋭くなっていく。

高垣楓での全てを見逃さんと。

「私、被虐される事に興奮するんです」

世界が止まった。



——は？

いやいや待て。

彼女は今何といった？

被虐される事に興奮する？ それはつまり、マゾという事か？

「被虐されるのが嬉しいってつまり、その、そういう事ですか？」

「ええ、そうです。マゾヒズム、と言ったほうが分かりやすいかもしれませんね。叩かれる事や殴られる事はもちろん、羞恥や辱めなども興奮します」

「それは何とも……凄いですね」

凄いですね、じゃないだろう。

「プロデューサーは、どうして私がトップアイドルを目指したかご存知ですか？」

「え？」

どうしてトップアイドルを目指したか？

そんなの、アイドルなら誰でも目指すものじゃないのか。

「理由は二つあります」

彼女は人差し指をピンと立てた。マニキュアはもう落とされていた。

「一つ目は、プロデューサーがそれを望んでいたからです。私はプロデューサーの所有

物です。プロデューサーの望みを叶えるのは当然ですよね？」

話し終わると、次は中指を立てた。

「二つ目は……説明するのが難しいですね。ご存知かもしれませんが、私あまり、気持ち
を伝えるのが得意じゃなくて……」

そうですね……トマトは上から落ちた方が綺麗、と言ったらいいんでしょうか。そ
れと同じです。高みから落ちたかつたんです。

私はマゾヒストですけど、誰に叩かれても、いつ殴られても興奮する、というわけ
はないんです。普通の人のキスと同じです。好きな人と、ロマンチックな雰囲気の中
でするキスは大好きでしょう？ でも相手が嫌いな人だったり、気分じゃない時にせがま
れたりするとお嫌でしょう？

それと同じです。

高い高いところから落ちて、とつても優しく、好きな人に加虐される。そうなる
もう、何をされても、何をさせられても興奮します。痛みも羞恥も、快楽に直結し
ます。いえ、直結するという言い方はすこし違うかもしれませんが……

痛いから、恥ずかしいから興奮するんです」

「な、なるほど」

「プロデューサーがさつきから私と距離を置いているのは、私の将来を心配してす
ね

「？」

「……」

「その心配はもうありませんよ。アイドル辞めましたから。違約金も全額払ってききました」

「は？」

彼女はまだまだこれからだ。それなのに、こんなタイミングで辞めるなんて……

それに、彼女ほどの大物になると違約金もバカにならないはずだ。

「信じられませんか？」

何を？

信じられない事ばかりだ。

彼女が被虐主義者で、俺の事が好きで、俺のためにトップアイドルになって、でもアイドルを辞めて。

「プロデューサー」

混乱する俺に彼女が手渡したのは、取り分け用の大きなさえ箸。

「これで私の太ももを刺してくださいませんか？」

「なっ……」

彼女はジッと俺を見てくる。

何を言ってるんだ、そんな事出来るわけないだろう。俺はそう言ってたしなめるべきだろう。

しかし俺は箸を受け取ると、机の下で、彼女の太ももを白いスカートの上から突き刺した。

「んっ！ くうっ……」

彫刻のような顔を歪めて、必死に痛みを耐える顔は、俺の嗜虐心を大いに昂らせた。俺はもう、どうでも良くなったのだ。

世間体とかキャリアとか常識とか、彼女の前では何の意味もない。そう、そうだった。

俺は彼女のファン第一号。

彼女の魅力に、とっくの昔に魅了されていたんだ。

「ぐう、んう……もつと強くしても、構いません、よう？」

もつと力を込めて、箸を押し付ける。加えて、グリグリと箸を捻る。

楓は体をすこしくの字に曲げ、眉をしかめ痛みに耐えている。しかし口角は下がり、笑みが抑えられないという様子だ。

よく見ると頬を赤く染まっている。

箸を止めると、楓は息を荒げて痛めつけられた所を愛おしそうにさすった。

「はあ、はあ…… ふふ。このスカート、もう履けませんね。ちなみに、十二万円です」
当たり前だが、さえ箸はさつきまで料理を取り分けるために使っていた。そのため先端は汚れている。

彼女の太ももは机の下にあるためここからは見えないが、彼女のスカートには汚いシミが付いているだろう。

俺がつけた汚れだ。

「……出ようか」

「分かりました。お会計、してきますね」

「タクシー止めてくるから」



高級マンションの42階。家賃は月136万円のこの部屋が、楓が住んでいる部屋だ。

部屋に入ると、そこにはほとんど生活感というものがなかった。机と椅子、ベッド、服、生活必需品だけで嗜好品の類が一切ない。

「あつ、少し待って下さい」

そう言うのと楓は俺の背中を押し、玄関に戻した。そしてリビングに入り、ドアを閉めた。

「いいですよ」

俺は遠慮なく廊下を進み、何をしているのだろうと期待に胸を膨らませながらドアを開けた。

——いない。楓がいない。

「いらつしやいませ」

いや、いた。

服を脱ぎ、下着姿になった彼女はドアのすぐ前で三つ指をつけて土下座していた。

ここまでしてくれるとは。

俺はお返しに、楓の頭を踏みつけた。

「ぐうう——」

顔を床に押し付けられ、呻くような声を発する。

しかし体は歓喜でプルプルと震えていた。俺はそのまま足の裏で楓の頭を撫でてあげた。

ぐりぐりぐりぐりぐり

——よく出来たぞ、と褒めてやる。

「きゃう、んぐつ、ああつ！」

あの楓を、トップアイドルを俺が足蹴にしている。

「あつ……」

足を上げると、切なそうに楓が声を上げた。

安心しろ、これで終わらせる気はない。

俺は足を15センチほど持ち上げた後、今度は思いっきり楓の後頭部目掛けて踏みつけた。

「ふぎゃっー」

優美さの欠片もない悲鳴をあげる。

楓は歓喜のあまり、体を大きく揺らしていた。俺は楓が快楽の余韻に浸っている間に、靴下を脱いだ。長時間革靴に包まれていた俺の足は、自分でも顔をしかめたくなくなるほど発酵していた。

「舐めろ」

「ほぐ」

俺が命じると楓は力の入らなくなった腕に何とか力を込め、見上げてきた。打ち付けてしまったのか、鼻からは鼻血が垂れていた。

淡い翠色の下着を、楓の血が赤く染めていく。

楓はまず手で俺の足を恭しく持ち上げると、ほっぺたにスリスリと擦り付けた。そして今度は鼻で指と指の間の臭いを嗅いでいく。鼻血が足につくが、不快感はなく、むしろ心地よい。

「プロデューサーに見下ろされながら、足を舐めるなんて……とつても興奮します。それでは、失礼いたしますね」

まず俺のつま先に優しくキスをする。そして親指から人差し指、中指、薬指、小指と順番に舐めていく。

チロチロと、初心な少年が初めて女体を舐める時のような、焦れたい舌での愛撫。どうですか、とばかりに上目遣いで見上げてくる。

「ペロ、ペロ……んう、しょっぱい………」

焦れたい。いつまで舌だけで舐める気だ。

俺は屈んで楓の頭を掴んで固定して、思いつき足を口内に突っ込んだ。

「おげえっ!」

横隔膜横ちんこや口蓋垂口蓋垂を直接蹴ったのに、楓は歯も立てず、嘔吐もせず、精一杯俺の足に奉仕した。

「うげっ! ぐえ! じゆるるるる——おえええ!」

足を吸い出し、思いつき指先を喉で舐めたところでとうとう楓は足を吐き出してし

まった。

楓の柔らかな唇と、俺の汚い足との間に唾液の橋がかかる。

『こいかぜ』、楓のデビューシングルにして代表曲。

この時代にあつて100万枚以上売り上げた、伝説的な歌。彼女の美声は数多の人々を虜にした。

その『こいかぜ』を歌った、多くの人が恋い焦がれた楓の喉を、俺の足拭きにする。あまりにも非現実すぎるその行為に、甘い官能が俺の頭と背筋を駆け巡った。

「お仕置き、ですか……？」

期待するように見上げる楓。

足を離してしまったことへのお仕置き、ということだろう。

俺はニコリと笑うと、彼女の髪を掴んだ。

「あつ髪を」

そしてそのまま、力任せにベットまでひきづった。

「痛い痛い痛い痛い！ プロデューサー!!」

髪を引つ張られるのはかなり痛いようで、楓は手足をばたつかせた。

しかし俺の手を攻撃して、手を離させるようなことはしない。

彼女をダブルサイズのベット脇に投げた。相当疲れたようで、肩で息をしながらベッ

ト脇にもたれかかる。

下着姿の楓が顔を赤くして、目を潤ませながら、ベット脇にもたれかかっている。その姿は俺をより一層高ぶらせた。

「楓……」

「プロデューサー……」

俺は屈んで楓の顎を掴み、キスをした。先ほどまでの過激な行為が嘘のような、優しいキス。

唇を離すと、名残惜しそうに潤んだ瞳でこちらを見つめる。俺は目を合わせながら、袖で楓の鼻血を拭ってあげた。

「プロデューサー。好きにして下さい。私はどんな行為でも受け入れます、それこそ人権を無視したようなことでも。そう、今から私には人権はありません。ただプロデューサーへの服従と、行為への背徳だけです。泣いて叫んで痛がっても、止めないで下さい」
そう言うのと楓は再び土下座した。

俺は楓に寄り添い、さつきと同じ様に顎を持ち上げた。そしてそのまま渾身の力を持って楓の頬を鞭打——つまりビンタした。

「きゃあー！」

叩く事を目的とした鞭打だが、楓の華奢な体は耐え切れず、横に吹き飛んで行った。

「痛い、痛いです……」

ポロポロと涙が溢れていた。

楓は地べたに這ったまま、紅葉型に腫れた頬を手でさすった。

——口はうつすらニヤけている。

「楓、手を後ろに回せ」

「はい」

言われた通り従順に、手を後ろに回す。俺は楓の後ろに回り込んで、手をベットのシーツでキツく結んだ。

解けないか縛りながら確かめっていると、楓の方から小さな喘ぎ声が聞こえてきた。この行為ですら、彼女にとっては快感らしい。

「立て」

俺が命令すると、彼女はプルプル産まれたての小鹿の様に震えながら立ち上がった。腰は快樂で砕けており、太ももは力が入らない様だ。

そして付け根の方には、水滴が滴っている。

俺は後ろから抱きしめる様に近づき、両手で楓のお腹を撫でた。肋骨や横腹、おへその周り。満遍なく撫でていく。

甘い愛撫で楓が油断したところで、思いつきり首筋に噛み付いた。

楓はさらなる快樂を得て、より一層体をしならせた。いよいよ自分で立っていられなくなったところでベットに腰掛けさせる。

楓が荒い息づかいと紅潮した顔で俺を見る。俺はマクラからマクラカバーを取り外し、楓の小さな頭にかぶせた。これで前は見えない。

そして楓の背を蹴り、ベットから蹴落とす。

「何処ですか、プロデューサー」

楓は俺を探し、フラフラと立ち上がった。

目が見えない、というのは思ったより恐怖心を煽る。

俺は音を立てず楓に近づき、左手で太ももの付け根を、右手でお腹を撫でた。

「ひゃっ！」

予想外の刺激に楓が一瞬硬直した瞬間——渾身の力を込めて楓のお腹を殴打した。

グニヤリと、何かが潰れる感触が拳に伝わった。

「かひゅー！」

空気が抜ける音と共に、楓はその場に崩れ落ちた。そして痛みのみあまりわ床の上で手足をのがれた虫の様にのたうち回ってる。

女の子のお腹は殴っちゃいけないって祖母が言ってたっけ。

「ぐう、いたあー！……ぐす、ひつく」

痛みのあまり、泣き出してしまった。昔から、少し子供っぽいところがあつたし、仕方がないか。

俺は彼女に忍び寄り、太ももに鞭打した。パチンツ！ と小君良い音が響く。

「あああつ!!」

バシンツ！

「ひぐつ!」

バシンツ!!

「も、もう無理ですプロデューサー！ これいじよ——」

バシンツ!!!

鞭打するたびに、楓の真っ白な太ももが赤く腫れ上がっていく。

楓は痛みに耐えかねて、立ち上がって逃げ出した。

トコトコトコ、ベットルームに彼女の軽い足音が響く。

俺はゆっくり彼女の方に近づき、再び腹部を殴打した。

「ハイへっ!」

先ほどの空気を吐き出す様な声ではなく、内臓を吐き出す様な生々しい音が口から零れる。

「あ、あああ……子宮が、降りてきているから、潰れちゃう」

お腹をガードしようにも、手は後ろで結ばれてる。

うつ伏せになってお腹を隠すと、今度は太ももに鞭打が飛んでくる。

——逃げ場はない。

俺は最後に、楓のおへその辺り——子宮を殴りつけた。深く拳が突き刺さり、楓の中を感じた。

楓は失禁しながら気絶してしまった。

体は快樂で小刻みに震え、時折大きく痙攣している。口はだらしなく開き、ヨダレやらなんやらがっぱなしだ。

しかしやはり、口角は下がっていた。



「起きたか」

「プロデューサー……」

最高の目覚め。

目を覚ますと、プロデューサーが私のすぐ側にいた。私は嬉しくなって、直ぐにプロデューサーに抱きついた。体を押し当てて、私の匂いをプロデューサーに擦り込む。

「体、大丈夫か？」

「大丈夫じゃありません。プロデューサー無しじゃ生きていけない体にされちゃいました」

少し動くと、太ももやお腹がズキリと痛んだ。見てみると、そこには手形や痣が所狭しとついていた。

プロデューサーが私につけた、征服の証。

それを感じると電気が背筋を走り、もうなんだかよく分からない体液が止めどなく分泌されて、下着を濡らした。

プロデューサーの視線が、私の体に釘告げになっている。私の傷だけの体を見て、興奮している。

すっかり加虐主義者になってくれた様だ。

私はこのために、ずっとプロデューサーを誘導してきた。

思わせぶりの態度をとり私だけを見る様にして、他のプロデューサーにプロデュースされる事で独占欲を燃え上がらせて、トップアイドルとして崇められる事で劣等感を与えて、接触を断つことで喪失感を味あわせる。

四年間も欲してきた私を手に入れて、加虐した今、プロデューサーは途方もない征服したいという欲に支配されているはず。

良いんですよ、プロデューサー。その支配要求に身を任せて、私を独占してくれて。お金ならありますから、ずっと一緒にいましょう。

「楓、首を絞めるよ」

プロデューサーはあの赤いマフラーで、私の首を絞めた。

知ってますよ、この赤いマフラーに自己投影してなさってるんでしょう？ これで首を絞める、首輪か何かの暗示でしょうか。

必死な様で、愉悦の様で、そんな表現でプロデューサーが私の首にマフラーを巻きつける。

トマトは高いところから落ちた方が美しい。

あんなに優して誠実だったプロデューサーが、今は私を痛めつけることしか考えていない。

——囚われの姫は、果たしてどちらでしょう？

白坂小梅 「えへへ……私を、殺したい？」

屍体愛好家という性癖がある。

加虐主義者や被虐主義者と比べてマイナーなこの性癖は、読んで字の如く、屍体を愛する性癖の事だ。

屍体愛好家の中には屍姦をする様な人間もいれば、ただ死体を愛でるだけという人間もいる。変わったところで、生きている人間を信用出来ないから殺して恋人や友人にする、という人までいるそうだ。

屍体愛好家の人間は少ないが、それ故か屍体愛好家の中でも更に特殊な性癖を持った人間が多いのだ。

——そして白坂小梅は、これまた一風変わった屍体愛好家である。



油断した、というべきなんだろうか。

部屋に入った時から変だな、とは思っていた。部屋には甘い匂いが充満していたし、

小梅がいつもより服をゆるく着て口元を隠していた。

だけどそこから甘い匂いの正体がクロクホルムである事を察して、小梅がそれを吸い込むのを防ぐ為に口元を隠している事を推察するのは、いくら何でも不可能だろう。

精々が芳香剤が溢れたとか、風邪でも引いたのかとか、その程度の考えしか思い浮かばなかった。

まだ手足は痺れていて、満足に動かすことが出来ない。いやそれどころか、舌も痺れてて、話すことすらできない。

「あ……起きたんだ。おは、よう」

薄暗いこの部屋に、小梅が入ってきた。

そう。なにを隠そう、あの人畜無害な小梅に一服盛られ、監禁されたのだ。

小梅の部屋で一緒にホラー映画を見て、気が付いたら、この部屋に監禁されていた。明らかにさつきまでいた女子寮じゃない。

部屋の中は暗く、金色の髪をした小梅の姿が辛うじて見えるくらいだ。部屋全体はともではないが見渡せない。いやそもそも、瞼が満足に動かなくて、満足に眼が開かない。

「まずは、こんな真似して……ご、ごめんなさい。で、でも……安心、して? 暴力を振るう気は……ないから」

ペこり、と小梅が頭を下げた。柔らかな金色の髪がヒラヒラと揺れる、けれどやっぱり片目は見えない。

どうしてこんな事をしたんだ？

ここはどこだ？

色々と言いたいけど、口が痺れて声が出ない。

「あ、あのね。今日は、私の……じ、自慰に付き合ってもらいたいの」

ハア!?

「私はね、ネクロファイリア屍体愛好家なんだ。えっと、つまり……屍体しか愛せないの。でも、新鮮な屍体は、バイオハザードでも起きないと……手に入らない。だから、私を屍体にするの。自分が見るも無残に、むごたらしく惨殺されるところを、想像して……えへへ、ワクワクしてきちゃった」

小梅は袖で隠れた両腕を恥ずかしそうに口元に寄せて、その場でびよんびよん跳ねた。

ネクロファイリア屍体愛好家、というのはよくわからない。けれど、自分をその状況にいる様に想像して、自慰をするというのは何となく分かるような気がした。

ロールプレイ、という言葉があるように、人は憧れているものになってみたいと思う生き物だ。その一環、なのだろうと思う。

それに一部のサディストなんかは自分で自分を「お仕置き」する事で、加虐的要求を満たす事があると聞く。その時、彼等はサディストでありマゾヒストでもある。

小梅が自分を屍体にする事は、つまりはそういった類の一つなのだろう。

ネクロフィリア
屍体愛好家でありながら、自分も屍体。

——こうして、小梅の自慰が始まった。



「えへへ……えへへ」

小梅は笑いながらプロデューサーの体の上によじ登った。幸い、小梅はとても軽い。声を出せない彼が苦しがつているのかどうかは分からないが、そこまで辛くはないはずだ。

首に手を回し、顔を胸元に引き寄せる。普段のしつかり者の彼からは考えられないほど、すんなりと小梅の胸に抱きかかえられる。

痩せすぎであればらが浮き出て、その上日光に当たらないせいで真っ白な小梅の体は、さながら屍体の様だ。

「どうせなら、一緒に楽しもう?」
もしかしたら、ネクロフィリア
屍体愛好家に目覚めるかもしれない

し。そしたら、一緒だね……」

返事を聞く前に、小梅は続きを話し始める。尤も、向こうは返事をできるような状態ではないが。

「想像、してみて。プロデューサーの太い腕が……私の事を思いつきり抱きしめるの。わ、私はね……最初戸惑うんだけど、抱きしめられた事が嬉しくて、直ぐに抱き返すの。ぎゅーって、えへへ……」

小梅はプロデューサーはプロデューサーの首から手を降ろし、背中をに手を回した。ほとんど筋肉のない細腕に出来る限り力を込め、抱きしめる。

直ぐに息が上がり、体が紅潮していく。疲労によるものか、それとも愉悦によるものか。

「チツクタツク、チツクタツク。一秒かな、二秒かな、十秒かな、それとももつとかな……？ ゆっくり、ゆっくり、少しづつ……でも確実に、プロデューサーの力が、強くなつていくの……」

動かないプロデューサーの腕を掴み、自分の腰に回す。そして再び小梅はプロデューサーの腰に手を回し、抱きしめた。

非力な小梅と、力の入らないプロデューサー。世界一非力な抱擁だった。

「私の骨——肋骨かな？ メキメキと軋んで、内臓も圧迫されていって、苦しくて、辛く

て、息苦しさが増していった……ついに、呼吸も出来なくなっちゃったね。口もパクパク開いて、涎が止まらなくて、涙も出てきちゃう……。唾液に少しずつ、血が混じっていくの。

私は掠れた声でわ、訳も分からず、謝るんだけど……プロデューサーは許してくれなくて、どンドンどンドン力を強めていくんだ。私は命の危険を感じて、必死に抵抗するの。じたばたーって」

小梅は爪を立てて、プロデューサーの背中を優しく引つ搔いた。引つ搔く、というよりは撫でるといふ表現が正しいか。

何も知らない人間が見れば、それは恋人への愛撫に見えるだろう。

今度は前歯で、鎖骨のあたりに噛み付く。そのままハムハムと噛み続け、プロデューサーの胸板を涎まみれにする。

「でも私の力は弱くて、プロデューサーにはかなわない……。私はダランと腕を下げて、諦めちゃうの。く、口からは血じゃなくて……吐瀉物と胃液が出始めてる。『オエー』って、ゾンビみたいだね、えへへ……」

限界まで密着しているせいで、お互いの心音が聞こえちゃうね。プロデューサーは興奮してるせいで、ドコドコドコドコって……とつても早い心音。私の心音はそれに反比例する様に、とくん……とくん……とくん……とくん……えへへ、遅くなってきたね。も

うすぐ、屍体になれる……よ。屍体になった私を、プロデューサーはどうするんだろうね？ 屍姦するのかな？ ゴミの様に捨てるのかな？ ホルマリン漬けにするのかな？」

小梅はプロデューサーに体を預けながら、ゆっくりと目を閉じていった。

体から力は抜けていき、手足だけでなく、首もダランとプロデューサーの胸板に預ける。

口はだらしなく開き、小梅の真つ白な肌とは正反対の、真つ赤な舌が覗いている。舌の先からは涎が滴り、ゆっくりとプロデューサーの胸板を伝っていく。

まったく力の入っていない状態で、もたれ合う二人。

——沈黙。無音。静寂。

光のない薄暗い部屋の中から、音までもが消えていく。

静まり返る闇の中、やがて小梅が絶頂を迎えた。

自分が屍体になったという興奮が身体を火照らせ、電気が背筋を駆け抜けていき、頭を刺激する。

「ん、ん、んんん————」

声にならない声を上げながら、プロデューサーの膝の上でガクガクと体を震わせた。

さつきまでの屍体の様な表情から一変、快楽に顔を歪ませた。興奮により、身体中に

血が回る。頬だけでなく、身体中が赤くなる。

腰はカクカクと前後運動をし、手足はバタバタと暴れ回っている。

「あ、あ、あ、あああー……」

最後にプロデューサーの動かない身体に抱きつき、身体を擦り付けながら余韻に浸る。

身体をくの字に反らし、下半身と腹部のみ擦り付け、白目で後ろを見る。

これが小梅の自慰。

屍体を愛でる彼女の、自分の愛で方。



「えへへ……どうだった? 気持ちいい?」

自慰を終えた小梅は、その感想を尋ねてきた。

一言で言えば、気持ち悪い。そう思った、そう感じた。

あんなもの、悍ましい以外の何物でもない。

今すぐ小梅の肩を掴んで、叱りつきたい。

しかし依然として薬は効いていて、体は動いてくれない。

「本当は……三週間経った屍体が好きなんだけど、我慢……出来なかった……」

そういうえば、昔死後三週間が経過したゾンビが好きだつて言つてたっけ。

まさか屍体ネックロファイリヤ愛好家的な意味で言つてたとは、どんな伏線回収だよ。

「今回は、オーソドックスな窒息死にした……よ。私の体格だったら、あのまま圧迫され続けたら、骨が折れて内臓に突き刺さつて死んじやったり……圧迫死する事もあると思うけど……最初だったから、ゆつくり味わえる、窒息死にしたんだ」

まるでT S U T A Y Aで借りてきたホラー映画の説明でもするかの様に、小梅は自らの死因を語つた。

「骨が軋んで、肉が痛めつけられて、内臓が潰されて……私は屍体になった。しかも、殺してくれた相手は、プロデューサー……嬉しくつて、爆発しそう。最高の、スプラッシュショーだね」

最低だ。

何処が最高なもんか。こんなのが許されるのは、映画の中だけだ。

「体力が回復してきたから、下着を変えてくる……ね。少しの間……ここで待つてて」

そう言つて小梅は、部屋を出て行つた。去り際、ハンカチの様なものを口に押し付けられた。

手足どころか、まだ口も痺れていて痺れていて、払い退ける事もできずに無抵抗に吸

い込んでしまう。

またあの……甘い……にお、い……



「夜……。ここからが本当の時間だよね……」

薄暗いこの部屋では昼も夜もあつたものではないが、どうやら外は夜らしい。

小梅は新しい服に着替え、戻ってきた。

手には——ナイフとハンマーがそれぞれ握られている。

案の定プロデューサーの膝の上に乗ると、クタツと置かれた手のひらにナイフとハンマーを握らせた。

「次は、撲殺と刺殺……両方一緒、だよ。欲張り……かな?」

小梅はそう言いながら、プロデューサーの上で楽しそうに揺れた。これから行われるスプラッタショーを想像して、気分を高めているのだろう。

「まずは、撲殺から……」

ハンマーを握っている方のプロデューサーの腕を持ち上げ、頭を叩かせる。

完全に力が入っていない、ハンマーの持つ重さだけの一撃だが、細い小梅はそれだけ

で頭をチカチカさせた。

小梅は痛みに性的快感を覚えたりはしないが、「死」に近づいてるといふ感覚には興奮を覚える。

だらしなく口角は下がり、足がガクガクと震え出す。

「はあああああ……」

十三歳とは思えないほど、艶やかな声が溢れる。それは完全に少女のものではなく、女のものだった。

「やっぱり、プロデューサーは最高……だね」

プロデューサーの首に手を回し、顔を近づけ、キスをした。最初は触れる位の優しいキス。

一度口を離し、大きく息を吸い、目を見つめながら、貪るようなキス。動かないプロデューサーの口内を、舌で蹂躪する。歯の裏や下を隈なく舐め上げる。

最後にプロデューサーの舌を思いつきり吸い上げる。下品な水音が広がるが、小梅は気にしない。

プロデューサーの唇を食りながら、プロデューサーのハンマーを持つ手を握る。プロデューサーの手を操り、自分の鎖骨の辺りを叩かせる。

同時に、小梅は自分に暗示をかける。「生命与奪の権利はプロデューサーにある。満

足させなければ殺される」。

小梅はより一層音を立ててプロデューサーの唇を食る。同時に、ハンマーを鎖骨に当てる回数も増やしていく。

ぴちやぴちや、ずるるるる

こん、こん、ゴンッ!

キスの音と、ハンマーの音だけが響く。

小梅は想像する。

必死でプロデューサーを満足させようとキスを続ける小梅。しかしプロデューサーは一向に満足せず、ひたすら小梅のことをハンマーで叩く。

最初は骨が少し痛む程度。痛みというよりむしろくすぐつたい。

しかし小梅の顔はすぐに歪むことになる。

ハンマーを振り下ろす力が徐々に強くなっていくのだ。ハンマーが肉を打ち、骨を響かせる。

力で敵わないことを知っている小梅は、プロデューサーに自分の価値を知ってもらおうと、無我夢中でキスをする。

しかし無慈悲に、プロデューサーがハンマーに込める力は少しづつ増えていく。

ハンマーを打ち付けられるたびに、小梅の体が大きく揺れる。叩かれたところは内出

血で赤紫色に滲み、ズキリと痛んだ。

筋肉の繊維が痛めつけられ、骨がミキミキと嫌な音を立てる。

「おえええええ！」

一際強く、プロデューサーがハンマーを振るった。

小梅は初めて、自分の内臓の位置を自覚した。

プロデューサーのハンマーに皮膚の上から圧迫され、柔らかい内臓が形を変える。形を変えた内臓が胃をせり上げ、吐き気がこみ上げてくる。

「あ……あ……あ……？」

吐瀉物がのどに突っ掛かり、息が出来なくなる。

殴られて、ゲロして、そのゲロが詰まって死んじやうはんて……

小梅は危機感を感じ、体をバタつかせる。

するとプロデューサーは、先程よりも強烈にハンマーを振るった。ハンマーは小梅の胸にあたり、胸骨を破った。衝撃はそこで止まらず、内臓を蹂躪し、背骨にまで駆け抜けた。

その結果肺の中の空気が圧迫され、喉を駆け抜けて行ったお陰で気道は確保できたが……

「う、う、う……」

小梅は胸の辺りを押さえ、その場で丸くなった。痛みのみならず、立ち上がることはおろか、声を出す事も出来ない。

呼吸のたびに身体中が悲鳴を上げ、自然と呼吸がハウリングのような押し殺したものとなる。

いよいよ脳がキャパシティを超え、吐き気すら催してきた。

小梅が己の死期が近づいてくるのを悟る中、プロデューサーもまたそれを理解した様だった。

ハンマーを持っている手の反対の手——つまりナイフを持っている手を動かし、小梅の子宮を突き刺した。

小梅は痩せすぎているせいで骨が浮き彫りになっているので、骨を避けてナイスを通すのは実に簡単だった。

柔らかい筋肉を貫き、無防備な子宮を切る。傷口からは熱い血が噴出し、流れ、地に滴る頃には冷たくなる。それでも更にナイフを突き刺すと、コツンと何か硬いものにつかった。恐らく、背骨であろう。

小梅は口を大きく開き、パクパクと何かを言おうとしたが、結局は空気が漏れた音が少しだけだった。

そしてナイフを引き抜いたプロデューサーは、小梅が次に何かする前に、首を搔つ捌

だ、と小梅は思った。

激しい快樂の後は、心地の良い余韻が残る。

小梅はプロデューサーの膝の上で、力なく倒れ伏した。

「そ、そろそろ…動けるように、なった…？」

答えはない。

その代わりにズリズリと、這うような音が聞こえてくる。

これから始まる今夜のメインスプラッタショーを想像して、小梅はより強い快樂に浸った。



いつの間にか、体の痺れが取れていた。

小梅の自慰を見ていたせいで、自分の体の様子を把握するのを忘れていた。なんてア

タシは馬鹿なんだ！

「小梅！」

アタシはPサンの屍体の上に乗っていた小梅を押し倒した。

小梅の体は軽く、あつけなくPサンの体の上から落ちた。ほんの少しだけ罪悪感が起

きたけど、Pサンの死体を間近で見て、直ぐにそんな思いは消えた。

「涼さん……」

「どうしてこんなことをしたんだ、小梅！」

アタシが怒鳴りつけると、小梅はへらへらと笑い始めた。

この世界の面白さを教えてくれたPサンを殺しておいて、アタシにとつての恩人であるPサンを殺しておいて、アタシの好きだった人を殺しておいて、こいつはへらへら笑ってる！ それを自覚すると、小梅への殺意がふつふつと体の奥底から湧き上がってきた。

その上、小梅はあろうことかPサンの屍体を弄んだんだ！ 屍体で自慰をするなんて、それもわざわざアタシの前で！

アタシは怒りを込めて、小梅を睨んだ。気づかないうちに、相当な力を込めて小梅の腕を握っていた。

けれど小梅は、アタシの怒りを受けて、思いつきり腕を握られて、それでも笑ってこ
う言った。

「えへへ……私を、殺したい？」

アタシの手には、いつの間にかハンマーとナイフが握られていた。

これはきつと、Pサンが最後に授けてくれたモノ。

アタシはそれを思いつき振り下ろした。

小梅は両手を広げて、それを受け入れた。

ハンマーで小梅の頭を何度も叩く。

ナイフで小梅の体を何度も斬り刻む。

その度に、小梅の体から力は抜けていき、アタシの手には小梅を殺した感触が色濃く残って行った。



「なあ小梅、俺を殺してくれないか……」

「えっ？」

最初は何かの冗談だと思ったんだ。

スプラッター好きの私を楽しませようとして、またプロデューサーさんが変な方向に走った。プロデューサーさんは仕事は凄くキツチリやるけど、プライベートではおつちよこちよいな人だから。

きつと今度もそう。そう思ったんだ。

「本気だ。本気なんだよ、小梅。俺は、俺は屍体愛好家だったんだ。お前と一緒にホラー映画を見ているうちに気がついたんだ。今では愛を通り越して、屍体を崇拜すらしてる」

屍体愛好家^{ネクロファイリア}、私はその単語を知ってた。ホラー映画仲間の間で良く出てくる単語だったから、調べたことがあった。

でもまさか、プロデューサーさんが屍体愛好家だったなんて……

「俺はきつと、そのうち耐えきれなくなって、アイドルを殺してしまおう。実際、もう限界が近いんだよ。頼む小梅、俺を殺してくれ。お前に、殺されたいんだ」

プロデューサーさんは泣きながら、けど笑いながら、そして震えながらそう私に頼んだ。

プロデューサーさん曰く、殺されることも快樂、らしい。

だから私は、プロデューサーさんを殺した。

私の非力な手で、時間を掛けてゆっくりと、首を絞めた。

そしてプロデューサーさんを、好きな人を殺した私は、その快感の虜になった。

私はその瞬間から、屍体愛好家^{ネクロファイリア}になった。プロデューサーさんみたいに、誰かを殺したくなって、殺されなくなった。

きつと、プロデューサーさんもそうだったんだ。プロデューサーも『あの子』を殺したから、ネクロファイリア屍体愛好家になったんだ。

『あの子』が殺された時、プロデューサーも死んだ。

プロデューサーが殺された時、私も死んだ。

小さな恋の密室事件。

えへへ、涼さん。

涼さんはどうなるのかな?

私を殺したあ……と、りようさ……んも……



「よう涼! 今日はずろしくな!」

「よろしく願います、夏樹さん」

? なんだか涼の様子がいつもと違う。

いつもはもつと、元気があるのに。つてなんだ、風邪引いてんのか。

「風邪引いたのか?」

「えっ?」

「ホラ、マスクしてんだろ」

「あ、ああ……」

なんだか今日の涼は煮え切らない。

まあいいか、ライブが始まれば、エンジンも入るだろう。

……そういえば、この控え室やけに甘い匂いがするな。

——松永涼は、一風変わった屍体ネクロファイリア愛好家である。